

2011-1-15 改訂

2011-2-1 一龕龍王祠を改訂

2012-6-18 一龕龍王祠を改訂

戸隠ガイド冊子 奥社篇

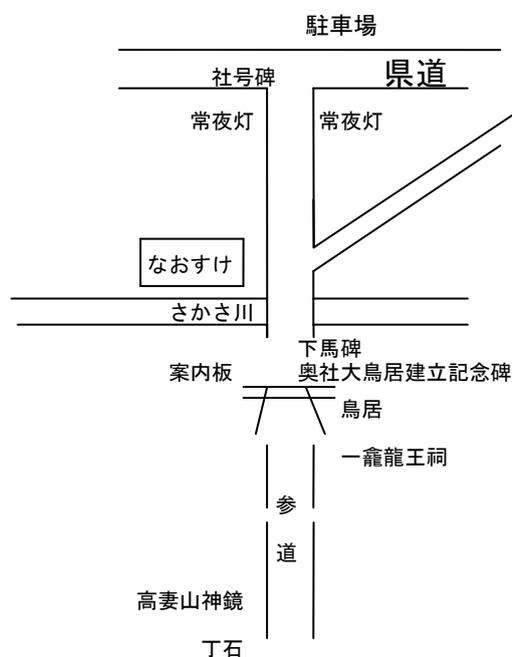
例文は、主なことだけに触れた簡単なガイド文です。その後の「参考」では細かく詳しく触れているので、ガイドをする人は適宜これを材料として各自の責任でガイドをして下さい。

前回の経験からしますと、「とにかく奥社の一番奥まで行って来た」ということで満足し、何の神様が祭られていたかも気になさらない方も多いうように思われました。したがって、人を集めてこの例文のように話す機会はあまりないと思います。

ただ、九頭龍の写真を持っていたり、カードを見せたり（「これ、なあに？」と聞いてくる）、シャッター係をしたりしていると、興味を持ってくれる人がいます。その場合に、例文程度の話しをすると、それで行ってしまう人と、さらに質問してくる人がいます。

この質問してくれる人を相手にじっくりと話すのが楽しみでした。

奥社鳥居付近



例文

こちらは一龕龍王（いちがんにゅうおう）の祠（ほこら）であります。戸隠といえば水の神様の九頭龍さんですが、これはちと違った龍王で、上の自動車道をさらに先に進んで山の中に入ると種池があります。農業に必要な水の基となる種水の池です。日照りの時には越後などからこの水をもらいに来ていました。種水をいただいて村にもどり、その水で雨を祈るわけです。この種池の主である一龕龍王を祭ったのがこの祠といわれています。現在でも、六月、中の巳の日の種池祭の時に、種池だけでなくここでも神主さんが祝詞をあげています。

随神門までの間に見るべきものといえますと、中程の右側に「高妻山神鏡たかつつまさんしんきょう」と彫った大きな石の碑が御座います。御覧下さい。その碑のすぐ先には丁石もありますので探してみてください。

《参考》

奥社入り口社号



伊藤萬蔵の寄贈。名古屋の明治時代の米穀商で、知恩院、東寺など諸寺に千基ともいわれる社号碑・狛犬などの石像物を寄贈した。

常夜灯



鳥居に向かって左の常夜灯



鳥居に向かって右の常夜灯

万延元年（1860年）、「高田講中」の寄進であるが、奥社正殿前の狛犬も明治の初めで同じ「高田講中」。さらに随神門の天井には明治十三年の高田直江町直参講中の額がある。越後高田に於ける戸隠信仰の広がりを感じさせる。

左の常夜灯

【参道中央から見て正面】【竿】常夜燈 【基礎】高田講中

【竿の県道側】宿坊 安住院寛海代

【基礎の県道側】^{横早} 平井助次郎 同 新涌井喜兵衛 同 和田長五郎 同 丸井清兵衛
同 白川治兵衛 ^{?古早} 山中三左衛門

【竿の鳥居側】萬延紀元庚申八月吉辰

【基礎の鳥居側】^{茶早} 森山鉄次郎 同 野中●吉 同 中林惣助 同 丸山庄五郎

同 中林岩吉 上紺屋^早 車屋栄蔵 上田端^早 池原豊吉

右の常夜灯

【参道中央から見て正面】【竿】常夜燈 【基礎】高田講中

【竿の県道側】宿坊 安住院寛海代

【基礎の県道側】^{横早} 小川久四郎 同 鷺塚伴次 同 増井十右衛

同 相澤助八 同 船木七郎● 同 川瀬甚左衛門

【竿の鳥居側】萬延紀元庚申八月吉辰

【基礎の鳥居側】^{茶早} 高橋勘兵衛 ^{稲田早} 石井清蔵 ●^早 佐藤惣蔵

^{新須賀早} 加藤清五郎 ^{古早} 本田直吉 ^{茶早} 金谷徳次郎 同 小泉由五郎

なお、「戸隠村の石像文化財」に ^{福田町} 坂井清哉（他七名）とあるが、^{稲田町} 石井清蔵 のことと思われる。

萬延紀元は万延元年（1860 年） 八月吉辰は八月吉日 のこと。安住院は奥院の院坊の一つ。

逆かさ川



森林公園あたりに始まって中社とは逆の方に流れるので、さかさ川。鳥居川に注いで千曲川に至る（というより、そもそも鳥居川の上流であって、この辺りを特にさかさ川という）。中社の側に流れた川は楠川へ、そして裾花川、犀川、千曲川と流れていく。下馬碑の所に載せた『善光寺道名所図会』の地図にも「さかさ川」とある。大正六年の「戸隠神社御境内並付近図」には必ず「鳥居川」とある。そこに「身滌所」と書いてあるので、ここで身滌をしたことになる。

橋から下流の淀みにいる魚はヤマメである。

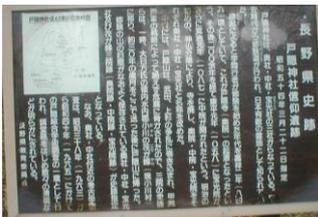
初代祠官、二代宮司の久山理安の「戸隠百首」（明治二十二年）に、

大門霧の夕晴

逆さ川渡せる霧の一筋に靡けは晴る夕くれの空

とある。逆さ川に渡った霧が一筋になびいて晴れる夕暮れの空の美しいことよ、の意。大門はここでは大鳥居であろう。

奥社案内板



以下文面。

「長野県史跡

戸隠神社信仰遺跡

昭和五十四年三月二十二日指定

戸隠神社は、奥社・中社・宝光（ほうこう）社の三社からなつ

ている。平安時代から修験道（しゅげんどう）が行われ、日本有数の霊地として知られていた。

縁起によると学問行者が修験を始めた年代を嘉祥二年（八四九）としていて、これが戸隠

寺（奥院）の起原となつたという。その後二〇〇余年を経て康平元年（一〇五八）に宝光院が、さらに寛治元年（一〇八七）に中院が開かれたという。明治の初めの、神仏分離により、寺を廃し、奥院・中院・宝光院をそれぞれ奥社・中社・宝光社と名称を改めた。

中世には、戸隠山は、武田、上杉の争乱に巻き込まれ、甲越両軍の戦略によつて絶えず危難に脅かされたので、三院の衆徒らは、一時、大日向氏の領内水内郡小川の篋が峰（現小川村）に移り、約三〇年の歳月をここで送つた後に戸隠山に帰つた。

修験の山の旧態がなおよく保存されている奥社・中社・宝光社及び篋が峰三院跡（奥院跡・中院跡・宝光院跡）が史跡指定となつている。

なお、奥社・中社付近の考古学調査は、昭和三十八年（一九六三）から昭和四十年（一九六五）にかけて戸隠総合学術調査の一環として行われ、講堂跡をはじめ数々の遺構などが明らかにされている。

長野県教育委員会

戸隠信仰の歴史が要領よく書かれている。文中に「嘉祥二年（八四九）」とある縁起は『阿娑縛抄』（十三世紀）で、『戸隠山顕光寺流記並序』（1458）では嘉祥三年（八五〇）とある。昨今の本や文章にも二年とか三年とか適当に書かれているが、本当に寺の出来た時期はわからないのが常ではあるが、記録としては、一般に後世のものが前の時代のものを写し間違えて年代が異なってくるので、古い『阿娑縛抄』を重視して「嘉祥二年（八四九）」で統一すべきであろう。

「戸隠寺」とあるのも『阿娑縛抄』の呼び方で、案内板を書いた教育委員会の解説者は『阿娑縛抄』に準じていることになる。「顕光寺」の名称は、『吾妻鏡』文治二年（一一八六年）三月十二日の項に、「乃具未済」（乃具は年貢）の庄のひとつとして善光寺（三井寺領）に並んで顕光寺（天台山末寺）とあるのが文献上に登場する最初である。戸隠山顕光寺と考えれば、「戸隠寺」でもいいことになる。二つの文献の内容の異同については、奥社正殿の九頭龍関係の伝承各種の所で後に触れる。

なお、戸隠総合学術調査の結果は『戸隠 総合学術調査報告』に載っている。基本文献である。

掟



- 掟 一、境内を清浄にすべし
二、花木を採るべからず
三、魚鳥を獲るべからず
四、火気に注意すべし

賽銭箱



下馬碑



ここから先は馬を下りろという碑だが、右横面に「宝永二年

乙酉秋」左横面に「助教院禅尼喜捨」とある。宝永二年は1705年。禅尼は仏門にはいった女子。また禅門に帰依した女子だが、女人禁制の奥社でこれはどう解釈したらいいのであろうか。現在の位置は鳥居の前だが、江戸時代の『善光寺道名所図会』の絵によれば、下馬碑に似た絵が仁王門前にあり、本文に「○下馬石二玉門の外に立」とある。何時、鳥居の所に移ったか不明であるが、明治二二年に戸隠に登った山田美妙の「戸隠山紀行」ではまだ随神門の所にある。

奥社大鳥居建立記念

鳥居の前。「平成七年七月吉日」とある。平成七年は1995年。

鳥居

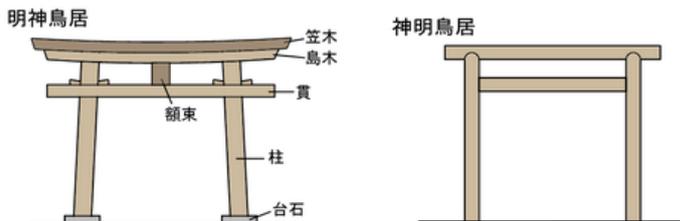


戸隠は江戸時代までは上野は寛永寺、徳川家の菩提寺であり、前々回のNHKの大河ドラマの篤姫も眠っているお寺だが、その末寺であって、顕光寺とっていた。お寺さんだから江戸時代には鳥居はなかったか、というと、やはりあった。「下馬碑」のところに掲げておいた江戸時代の『善光寺道名所図会』の地図にもものっている（本文には「○朱の鳥居十五丁目也さかさ川の側にたつ」とある）。朱塗りの鳥居付きのお寺さんであった訳である。

神仏習合とって、神仏が渾然一体となっていたのが日本の習慣で、上野の寛永寺を開いた天海も山王一実神道という神道の流派を立てている。しかし、明治の初めに神仏分離令

が出た時に、戸隠の仏さまは山を下りられ、神さまだけが残られて神社となった。

この鳥居は、上が笠木と島



木があり、共に反っている明神鳥居。貫は柱の外に出ている。戸隠の場合、中社も宝光社も火之御子社も明神鳥居であるが、本社の手力雄命を祭った鳥居だけは神明鳥居である。ただし、『善光寺



道名所図会』の地図にはその場所には鳥居らしきものはなにもない。明治以後の「信州戸隠神社略図」では二本の縦の柱の上に横一本を渡してある門のごときものが設置してある。個人所有の昭和40年の写真では明神鳥居になっている。現在の神明鳥居は手力雄命が伊勢では天照大御神の相殿であるので、それに倣ったのかもしれないが、理由は不明。なお「信州戸隠神社略図」では、飯綱にあった石造の一の鳥居は両部鳥居であるが、弘化四年(1847)の地震で崩壊。明治九年に再建されたものは左の写真のように両部鳥居である。奥社の手力雄を祭った本社手前の飯綱大明神は神明鳥居に似ているが貫が柱の外に出ているのが茨城県鹿嶋市にある鹿島神宮と同じ鹿島鳥居。

なお、「貫」が突き出ている明神鳥居が男の鳥居で、出していない神明鳥居が女の鳥居であるという俗説がある。

鳥居を潜るときは軽く頭を下げてから、参道の中央は正中(せいちゅう)と呼ばれ神様の通り道とされているので、鳥居の中央からは入らない、神様にお尻を向けないように中央右から入るときは右足から、左から入るときは左足から、等々いろいろなことがいわれている。

平成七年七月二十七日竣工。

次に「鳥居」の一般的解説をあげておく。

「■鳥居の起源■〈三橋 健〉(C)小学館

一般に鳥居は、神に鶏を供えるときの止まり木、すなわち鶏居であると解されているが、表記や語源については諸説があって一定していない。『倭名抄(わみょうしょう)』『伊呂波(いろは)字類抄』などには「鶏栖」と表記し、鳥の居る所と説明してある。また「通り入り」「止処(トマリキ)」の意などとも説明されるが、いずれも確証はない。中国の華表(かひょう)を「トリエ」と訓(よ)み、わが国の鳥居と同意に解することもあるが、鳥居と華表は同じものではない。鳥居の起源は外來說と在來說とに分けられるが、現在のところどちらかに確定することはできない。形式からすれば、わが国の鳥居に似たものはインド(ストゥーパの前に立つトラーナ)、中国(牌楼(ぱいろう)や前出の華表)、韓国(紅箭(こうせん)門)などにもあるが、それがそのままたらされたと考えることもできない。

わが国では天照大神(あまてらすおおみかみ)が岩屋に籠(こも)られたとき、岩戸の前に木を立て鶏を止まらせて鳴かせたのが鳥居の始まりであるといい、一説に天稚彦(あめわかひこ)の門前の湯津杜木(ゆつかつら)に無名雉(ななしきじ)が止まり居ることを鳥居の起源とするなどの説もみられるが、いずれも根拠のあることではない。鳥居のマークは神社のシンボルとして地図などに示されている。初宮詣(もう)でのことを鳥居参りといい、神社を中心にして発達した町を鳥居前町(とりいまえまち)と称するなどは、鳥居が神社そのものを示す代表的な建造物であるからにはほかならないが、それが神社の何にあたるかは明確ではない。一般には神門であると説明されるが、これとて納得のできるものではない。」

一 龕龍王祠

一龕龍王という龍王はいない。龕が一つあってそこに龍王を祭っていたので「一龕龍王」

というようになったのであろうか。「一つの龕に祭られている龍王」くらいの意味。「龕」は仏像を安置するくぼんだ所で、厨子をも意味する。祠の前の碑「一龕龍王祠」の裏側は、は、

昭和四十五年五月吉日

寄進 名古屋市港区辰巳町

磯谷龍峯

桂子

??? (不明字)

とある。

『戸隠村の石像文化財』によれば「石工 森又蔵」とあるという。

この祠そのものは、辻家を取り次ぎして磯谷氏が建てた物であるが、江戸時代の「戸隠山往来」に「逆川に口を嗽ぎ、一含竜の祠」とある。渡邊一意「種ヶ池伝説と九頭龍権現」（昭和十三年）は、栗田家の次男が龍となって飯綱の大蛇ヶ池に住み、後に種池に移って九頭龍に奉仕した伝説を紹介し、この竜神を一閑龍王とってさかさ川の辺りに六月中の巳の日に種ヶ池とともに祭っているという。裏手に昔は「一甕流（いっかんりゅう?）」呼ばれる所があり、雨乞いの神事に種池まで行かなくてもここの水でやる事もあったとい伝える人もいる。

この場所で龍王の祭が行われていたことは慶応四年の文書で判るといわれているし、現在も六月、中の巳の日の祭にはここと種池とさらに念仏池で祝詞もあげられている。とはいえ、種池の竜王の祠が何故ここにあるのか、および九頭竜との関係はよく分からない。明治三十六年の「戸隠山案内記」（宮司 上井栄雄・宮澤春文共編）に載る「年中祭典次第」にはこの種池祭はない。

想像を逞しくすれば、元禄時代に種池を含む黒姫山東南斜面の境界争いがあったが、種池一帯までは戸隠山境内であるという戸隠山衆徒の主張は退けられて、水内郡九十五カ村及び衆徒の入会山となった。しかし、この種池が戸隠のものであることを象徴的にあらわすために種池の龍王を現在の一龕龍王祠の所に祭り、時に種池の水の代わりにとしたのかもしれない。

なお、日本では蛇と龍も区別されることなく習合しているが、六月、中の巳の日の「巳」は蛇を意味するし、宿坊に残されている九頭龍の像や図はとぐろを巻いているので龍と云っても戸隠では蛇のイメージが強いのかも知れない。

次は江戸時代の『戸隠靈験談』（二澤家蔵）の中の、種水の靈験を現す一話である。常夜灯の寄進が越後の高田の者だったが、これも越後の話である。文中の「藤崎」は「とうざき」、「百川」は「ももがわ」と現在はいふ。

以前、申年の秋の頃、越後の国頸城郡の藤崎と百川という二つの村から奥院の安住院へ請雨（しょうう）の祈禱を頼みにきたので、深く祈念して種ヶ池のお水を与えたのだが、この水は種水といって道中でも下におくことはできず、一七日（ひとなのか）の間、施主の方に置いて祈り、七日を経れば当山へ持ち帰って種ヶ池へ戻すことにな

っている。百川村で三日と半日祈ったが空は晴れ渡り雨の降る様子もみえないので、藤崎村からお水を受け取りに来たので村境の川岸まで百川村の者もお水を持参し、ここで藤崎村の者へ渡したのだが、たちまちにして雲が起りおびただしく雨が降り出したので、みんなして喜び合った。けれどもこの二つの村以外はちょっとした小雨であったという、不思議なことである。



種池の解説板



種池と注連縄

解説板の文句

「種池 古来から早ばつの年には、この池の水を汲んで戸隠神社に雨乞いを祈願すると、その里には必ず雨が降るといわれています。湧出と排出口のない池です。戸隠観光協会 信濃町」

ただし、この種池よりさらに奥にある古池が昔の種池であると地元では言う。

奥社鳥居から見た参道



季節毎にいろいろな花が咲いている。

高妻山神鏡碑



戸隠山の後には最高峰の高妻山 2353メートルが聳えていて、そこへ昔の修験者が通った登山道を大澤通り^{おおさわどお}というが、その入り口に高妻山神鏡碑がある。高妻山の頂上には高さ2メートル、直径63センチ、重さ40キロかとも思われるの文久二年（1862）の銘のある青銅の鏡がある。

碑の正面の文字は右から

高妻山神鏡
大澤講々長武津信
大澤通荻分



「荻分」は荻分道のこと。

右側面に「慶応二丙寅七月」の文字あり。古くは『戸隠山顕光寺流記並序』に、高妻の「峯東有八尺円鏡」とあるが、これは岩か何かを鏡に見立てたもので、これではなく文久二年に高妻山に設置された青銅鏡を指す。

幕末に裏山に入峯した仏心が残した「高妻大権現」の絵図の詞書きの一部に「文久二壬戌年七月二十六日頂上高妻へ建神鏡ヲ次ニ子年歳長久神願大澤通り謹尋入り慶応元丑年六月二十六日苜分成就」とある。文久二年は1862年、子年は元治元年甲子で1864年、慶応元年は丑年で1868年。つまり、1862年（文久二年）に高妻山に神鏡を建て、1864年に大澤通りの整備に着手して1868年に道作りの苜分を成就させた、ということか。

この碑の所から高妻山への大澤通りの道が始まったとか、青銅鏡を高妻山に設置した記念の碑との話もあるが、青銅鏡を設置及び苜分成就の記念の碑であろう。（裏に碑文もあるので、設置の経緯は拓本を取って調べる必要がある。）

高妻山の神鏡

四方八面の峯を見おろす高妻の山をみ空にうつす神鏡（「戸隠百首」）

四方八方の峯を見下ろす高妻山、その高い高妻山をさらに高い空に映しだしている神鏡だことよ

「戸隠神社報」平成8年1月1日号の「平成七年度太々神楽献奏講」の中に「当国大澤講」がある。

神々の系譜

高妻山の祭神は高御産巢日神で、中社の思兼命、火之御子社に天の鈿女命と共に祭られている栲幡千千姫、この二柱の神様は高御産巢日神の御子。また奥社の手力雄命と宝光社の表春命は思兼命のお子様といわれているので高御産巢日神のお孫さんということになる。つまりは、高妻山の高御産巢日神は戸隠に祭られる神々の最高峰でもあり、日本神話の神々がここ戸隠に展開していることになる。

『古事記』によれば戸隠の神々の系譜は次のようになる。

天之御中主神→高御産巢日神→神産巢日神→宇摩志阿斯訶備比古遲神→天之常立神

以上五柱の神は独神で「別天つ神」という。天之常立神に続いて、

→国之常立神→豊雲野神→

この二柱の神も独神。続いて、

宇比地邇神・妹須比智邇神→角杵神・妹活杵神→意富斗能地神・妹大斗乃弁神→於母陀流神・妹阿夜訶志古泥神→伊耶那岐神・妹伊耶那美神

国之常立神からを神世七代という。宇比地邇神・妹須比智邇神以下は男女となっている。

そして伊耶那岐神が黄泉の国から戻って禊ぎをした時に、次の「三貴子」が生まれる。

左の目を洗った時に天照大御神、右の目を洗った時に月読命、鼻を洗った時に健甕須佐之男命。

これらの神様の系譜は、人間のように親から子へという先祖代々の系譜ではない。とにかくも次々に現れてきた神様で、独りでに生まれたり、男女となっても次の男女を生んだようでもない。伊耶那岐・伊耶那美にいたって始めて夫婦のように見えるが、二人で島を生んだり、風の神を生んだりもする。かつ、禊ぎで自分の身体からも生む。とにかく、

伊耶那岐神→天照大御神 となる。

そして、須佐之男命が天照大御神の珠を咬んで吹き出した霧から生まれたのが忍穗耳命で、この場合に珠の持ち主の子となるので、

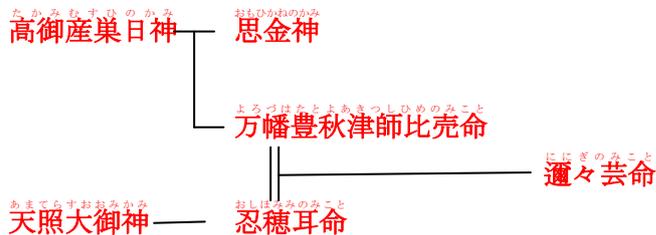
天照大御神→忍穗耳命 となる。

一方、二番目に生じていた高御産巢日神にいつの間にか息子の思金神と、娘の万幡豊秋津師比売命とができていて（子が出来た話は載っていないが、登場するときに「子である」と説明される）、

高御産巢日神→思金神・万幡豊秋津師比売命 となっている。

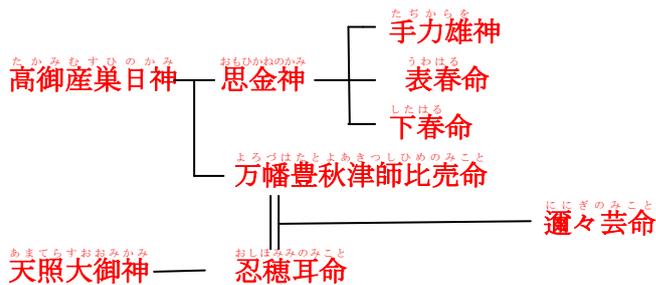
そして忍穗耳命と万幡豊秋津師比売命（別名・栲幡千千姫）の間に生まれた子が天孫である邇々芸命。

以上から系譜を作ると



となる。ただし、天照大御神は高御産巢日神から十代ほど後の神様で同世代ではない。

そして、『古事記』（712年）より百年ほど後の『先代旧事本紀』（9世紀）という偽書（推古天皇の時代に聖徳太子と蘇我馬子とが著したということになっている。これだと『古事記』よりも古いことになる）に思金神（思兼命）の子として表春命と下春命が現れる。さらに十三世紀後半の偽書『神皇実録』では、手力雄神も思金命の子とされる。すべてをまとめると、



この高御産巢日神という神様は、相当の神様で、天照大御神が子である忍穗耳に葦原の中国を治めさせようとするが、忍穗耳は「混乱している国だ」といって途中で帰ってきてしまう。すると、高御産巢日神と天照大御神が神々を集めて相談する。つまり、高御産巢日神と天照大御神は並列して登場する偉い神様だが、その内に名前が出てこなくなってしまう神様。邇々芸の外祖父という位置だが、まるで藤原氏の娘が帝の後となって次の帝を生むと権力を握るみたいな立場である。

なお、戸隠の火之御子社は宇受女命が主神で、他に高御産巢日神、栲幡千千姫、忍穗耳命を祭っている。

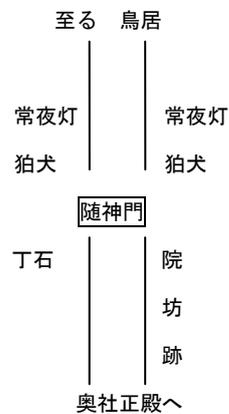
ちょういし
丁石



「ちょういし」という。「高妻山神鏡碑」の先の丁石で「廿一町」とある。随神門の直ぐ先に木の根に包まれた廿三町がある。

一の鳥居跡近くに「従是中院神前迄五十三丁」の石があり、ここを起点に宝光社まで四十三町、中社へは五十三町、中社から奥社へは三十町といわれていた。一町は約 109.1 メートル。

随神門（隨身門）付近



例文

随神門の左右の像は、他の神社では左大臣とか矢大臣といわれていますが、ここでは櫛石窓ノ神、豊石窓ノ神さまとなっています。天孫降臨、つまり天照大御神のお孫さんの迹々芸ノ命、いまの天皇の先祖と言うことになりますが、高天原から高千穂峰に天降ります。この時に、本殿の手力雄命、中社の思兼命の命、火之御子社の天の鈿女命も随っています。そして、この櫛石窓ノ神、豊石窓ノ神さまも随ってきました。つまり、戸隠は天孫降臨のお供をした神様たちが祭られている訳であります。御門の神様で、昔は京都の宮中でも四方の門を護っていらっしやいました。

神域に邪悪なものが入って来るのを防ぐ門で、働きはお寺の仁王門と同じです。というより、この随神門は実は、神仏習合時代には仁王門で、仁王様がいました。その跡に据えられた随神さまも仁王さまに似たところがありまして、神社によっては阿吽、向かって右側が口を開いた阿（あ）、左側が閉じた吽（うん）になっています。さて、この戸隠の随神さまはどうでしょうか。



向かって左 櫛石窓神 向かって右 豊石窓神

門をくぐりますと左側に石垣が続いています。昔の院坊屋敷、いまの中社や宝光社に見られる宿坊の跡です。



鳥居の内側にあったので明治以降は神仏分離と言うことで廃止され、中社や宝光社に移されました。

参道の両側それぞれ 50m の幅が社有地で見事な杉並木となっています。

樹齢 400 年。参道を夾んで両側に約 80 本ずつあるといわれ、中には幹回り 5m



ほどの大木もみられます。上杉景勝が、朝鮮出兵から無事帰れたことへのお礼として戸隠を復興した時に、多くの杉も寄進したともいわれております。

さらに奥社に向かって進みますと、左側にほうとうこくしほこうきざんかんのんどうあと法燈国師母公祈願観音堂址・ほうきょういんとう宝篋印塔入口と書かれた柱が出ています。時間がありましたら、観音堂址へは、参拝の帰りに寄られたらいかがかと思います。

本社まで一キロですが、後半で登りが入りますので 25 分ほどです。

《参考》

狛犬



狛犬は「獅子(しし)に似た像。胡麻犬、高麗犬とも書く。獅子形とも、また獅子狛犬とも称し、単に狛ともよぶ。本来は獅子であるが、昔、高麗から伝来したので高麗犬というとの説が有力。一説に、魔除(よ)けとして置かれたので拒魔犬とも。『禁秘抄』に、清涼殿の御簾(みす)や几帳(きちょう)の裾(すそ)に鎮子(ちんし)として置かれたとあり、左を獅子としている。多くは神社の社頭や社殿の前

などに守護、魔除けのために置かれるが、寺院に置かれる場合もある。向かい合わせに、一つは口を開き、他は閉じるという阿吽(あうん)の一对として置かれるのが普通であるが、両方とも開口、閉口などの例外もある。(C)小学館

随神門の狛犬は左右ともに獅子であり、昭和六十二年の寄進。古い時代の文字通りの狛犬は本社の前にある。

なお、一般に左右同形→狛犬と獅子→左右同形 という変遷を経ているが、獅子だけでも狛犬といわれている。「口を開けた狛犬阿像」と「口を閉じた獅子吽像」の組み合わせもある。狛犬らしさを発揮したものは奥社相殿の狛犬のように頭には角がある。

永代 常夜燈



雪見灯籠によくある丸い笠が特徴。もちろん雪見と異なって中台も竿もある。田子村人の寄進。(彫った文字を要調査)



普通の雪見灯籠

左右で寄進者は異なる。向かって左は上田の、右は田子村の人々のよう。取り次ぎは佛性院(奥院の院坊の一つ)とある。「歴史の道調査報告書 XVI~XXII」に「文化□年取次仏性院上田在軽井沢口条村」とあるという。但し、これは向かって左側のみであろう。右側は田子村。

随神門・随神

本来は「隨身」であるが「随神」とすることも多い。門は三間一戸(正面が三間で戸口が一つ)の^{いりもなかやぶさ}入母屋^{やつあしもん}葺きの八脚門(正面の柱が四本だが、後に八本の控柱があって、これで八脚となる)で、宝永七年(1710)の建立(「上水内神社誌」224頁)。神域に邪悪なものが入って来るのを防ぐ門。お寺の仁王門と同じ働きをする、というより、この随神門は神仏習合時代には仁王門であり、仁王様は明治の神仏分離令の時に、善光寺右手の^{かんぱいじ}寛慶寺に移された。



もともと神社には仁王門を模した随神門があったので、ごく自然に仁王さまと随神さまが入れ替わったと思われる。ただ、普通、仁王門は楼門であるから、この門は質素ではある。隨身(随神)は仁王さまに模したもので、^{ただ}多田神社や^{はるな}榛名神社の随神像は阿吽、口を開いた阿(あ)と閉じた吽(うん)になっている。戸隠の随神さまもそのように見える。

随神さまは平安時代の武官と同様、正式な隨身の服装をしていて、門守神(かどもりのかみ)、看督長(かどのおさ・検非違使の役人)ともいわれる。俗に左大臣、右大臣とかいわれたり、向かって左方の弓矢をもっている神像を矢大臣などといったりしている神社もある。

『戸隠 総合学術調査報告』では左大臣、右大臣と説明されているが、『戸隠信仰の世界』では櫛石窓神(くしいわまどのかみ)、豊石窓神(とよいわまどのかみ)となっている。

戸隠の場合は、次のように解釈される。

初代祠官の久山理安の「戸隠百首」に、

御門祭の御幣焼

内外（うちとの）を言排^{いひそけ}まして皇^{すめろき}ろきの御門を守る神の御幣^{みてぐら}
内の門でも外の門でも、悪い神が悪い言葉で入ろうとすればそれを言い退け、
帝の御門を守る神様への幣帛

この歌は、『延喜式祝詞』にある次の「祈年祭」の祝詞をふまえている。

御門の御巫の称辞^{みかひなご たたへごと}竟^まへ奉^{まつ}る、皇神等の前に白さく、櫛磐間門命・豊磐間門命と御名
は白して辞竟^{よも}へ奉^{まつ}らば、四方の御門に、湯都磐村の如く塞^{ふさ}り坐^まして、朝には御門を開
き奉^{まつ}り、夕には御門を閉^ふて奉^{まつ}りて、疎^{うと}ぶる物の下より往^ゆかば下を守り、上より往^ゆかば
上を守り、夜の守^{まもり}・日の守^{まもり}に守^{まも}り奉^{まつ}るが故に、皇御孫ノ命の宇豆の幣帛^{あした}を、称辞^{あした}竟^まへ
奉^{まつ}らくと宣^{のたま}ふ。

御門の御巫が齋き祭る神々に申し上げます。御名を櫛磐間門命・豊磐間門命と申
して、丁重にお祭りを営みますならば、神聖な多くの大盤石のごとく、四方の御
門にどっかと立ち塞がり給うて、朝に夕に御門の開閉をお守りになり、皇居に親
しまぬ邪神妖魔が、あるいは空から、あるいは地から入ろうと致すのを、昼夜の
別なく不断にお守りすることにより、ここに天皇の尊い幣帛を献ります。（『祝詞
新講』より）

つまり、随神門の神様は、昔、宮中で四方の御門を護った神である櫛石窓神、豊石窓神と
いうことになる。

『古事記』によれば、天孫降臨の時に、中社に祭られる思兼命（思金神）、奥社に祭られる
手力雄命（手力男神）、それに天石門別神（あめのいわどわけのかみ）がお供をするが、こ
の天石門別神の別名が櫛石窓神また豊石窓神である。『古語拾遺』では別名ではなくて二柱
の神様となって天の岩屋戸を出て移られた天照大御神の宮殿の門を護っている。

天石門別神は思兼命や手力雄命と一緒に天降ったのだから、戸隠の随神門の神様としては、
櫛石窓神、豊石窓神と考えるのがふさわしい。

櫛石窓神、豊石窓神の表記は、音の「くしいわまどのかみ」「とよいわまどのかみ」に漢字
を当てたのであって、「くし」は霊妙な、「とよ」は大きな、「いわ」は力強い、「ま」は真
正な、「と」は戸のことであろう。つまり「戸の神」である。「窓」という意味はない。

なお、櫛石窓神、豊石窓神は天石門別神といわれて、手力雄命と同じ天の岩戸を押し開け
た神様のようにも思われるが、『日本書紀』の「一書曰」に「瓊瓊杵尊。則引開天磐戸。
排分天八重雲、以奉降之。」とあるように、天上と地上を隔てる天の岩戸を引き開けた神
さまであろう。

杉並木

樹齢 400 年。約 300 本といわれ、中には幹回り 5m ほどの大木もみられる。戸隠は武田と
上杉の戦いに巻き込まれて、小川村に三十年ばかりも避難していたことがあり、上杉謙信

の次の代の上杉景勝が、朝鮮出兵から無事帰れたことへのお礼に戸隠を復興した時に、多くの杉も寄進したといわれている。参道の両側へ各 50m の幅が社有地。

杉の根本に抱き込まれた丁石



随神門を出て右側六本目の杉の根本に、杉の根の成長と共に抱き込まれてしまった丁石がわずかに見える。もう読めないが「廿三丁」だったらしい。

宿坊跡の石垣

案内板

<奥社坊跡>

奥社随神門（旧仁王門）の内側道側左右にある嘉祥3年（850年）以来戸隠権現に奉仕した院坊の跡である。明治維新後神社となり国有境内地になった為にここにあった院坊は中社、宝光社に住居を移した。 戸隠観光協会

随神門をくぐると左側に石垣が続いている。昔の院坊屋敷、いまの中社や宝光社に見られる宿坊の跡。十いくつもの院坊があったが、冬の奥社での住まいはきつく、江戸中期頃より中院や宝光院に里坊を置いて冬を過ごすようにしていた。そして明治以降は神仏分離と言うことで廃止され、里坊だけになった。神社になってからは奥社、中社、宝光社とっているが、寺であった時代は奥院、中院、宝光院といていた。いまでも中社の宿坊などと仏教用語を用いたり、旧徳善院とか旧行勝院といているのはその名残である。

院・坊・宿坊・僧坊の定義

院 「大寺の境内にあって、その支配下に属する寺で、その大寺の寺務を司る僧侶たちの居住する場所。 (C)小学館」

坊 「僧侶の居所。転じて僧侶をいう。また、僧の名に添えて用いる。 (C)小学館」

宿坊 「出張の僧または参詣人の宿泊に当てられた寺坊。宿院。僧自身の僧坊。 (C)小学館」

僧坊 「僧たちが止住し起居する寺院内の家屋。僧尼の宿所。坊舎。 (C)小学館」

奥院の場合は寺の勤めが中心で講の組織を持っていなかった。よって、宿坊という場合に、参詣人の宿泊に当てられた寺坊ではなく、僧たちが止住し起居する寺院内の家屋である僧坊であったと思われる。

大乘妙典一字一石書写碑・多宝塔

法燈国師母公祈願観音堂址・宝篋印塔

例文



ここに、江戸時代の石造の六角柱の法華多宝塔と大乘妙典一字一石書写碑があります。

法華多宝塔は宝永二年、1705年のもので、多宝塔とはお釈迦さまが法華経を説いているときに大地から巨大な七宝の塔が湧き出し、空中にそびえたということに由来します。その塔の六面には多宝

如来がお釈迦様に呼びかけたことばが刻まれています。

また大乘妙典とは法華経のことで、一字一石とは、経文を墨または朱で一字ずつ小石一個に書いたもので、これを地中に埋めて、祖先の冥福を祈ります。寛延四年、1751年のものです。

どちらも法華経関係であります。修験道においては法華経が大切に、中社と奥社の途中には法華持経者である積長明火定の跡があります。



反対側に、法燈国師母公祈願観音堂址・宝篋印塔入口の案内があります。ちょっと奥まで二百メートルほど入っていきますと、観音堂址と



いわれ、付近の石祠や石塔を集めた仏塚があります。右側の宝篋印塔は、法燈国師の母がここで戸隠権現である観音さまに祈って国師を身ごもったという言い伝えにちなんで供養のために建てられたも

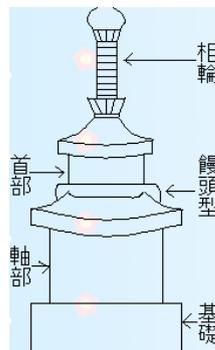


ので、ここにも一石に一字が書かれた法華経が埋蔵されています。

ところで、奥院は女人禁制であったのに、国師の母がここで祈ったというのは不思議ですね。みなさんはこの謎をどう解きますか。

《参考》

法華多宝塔



『戸隠村の石像文化財』には(宝永二年 1705 空映 世慶)とある。『戸隠 総合学術調査報告』207 頁には「宝永二年堯慶ら建立」とある。「歴史の道調査報告書 XVI～XXII」には「宝永二天七月十五日施主空○・堯慶)(○は「狭」の偏を「日」にした文字)。実見するに「宝永二 施主 空映 七月十五日 世慶」と見えるのだが。軸部は六面でそれぞれ「法華多宝塔」「善哉善哉 釈迦牟尼」「世尊能以 平等大慧」「教菩薩法 佛祈護念」

「妙法華経 為大衆説」「宝永二 施主 空映 七月十五日 世慶」。

法華経の「見宝塔品第十一」に「爾時宝塔中。出大音声。歎言善哉善哉。釈迦牟尼世尊。能以 平等大慧。教菩薩法。仏所護念。妙法華経。為大衆説。」とあるのによる。

爾の時、宝塔の中より。大音声を出して歎じて言わく、「善き哉、善き哉、釈迦牟尼世尊

よ、能く平等大慧・教菩薩法・仏所護念の妙法華經を以て大衆の為に説きたもう。

すると、その宝石のできたストゥーバからこのような声が [聞こえて] きた。「素晴らしいことです。素晴らしいことです。シャーキャムニ（釈迦牟尼）世尊よ。あなたは、この“白蓮華のように最も優れた正しい教え”（妙法蓮華）という法門を見事に説かれました。」

以上、訳は、植木雅俊訳・岩波書店「法華經」による多宝如来が法蓮華經を説かれたお釈迦様を褒め称えた言葉。

多宝塔は通常はお寺さんの大きな塔そのもの。

宝塔とは「広義にはすべての仏塔に対する美称であるが、狭義には円筒形の塔身に方形の屋根を架け、頂上に相輪(そうりん)を立てた形式の一重塔をいう。(C)小学館」。

多宝塔とは「多宝如来を安置した塔。釈迦が法華經を説いたとき、空中に現出したという七宝の塔に基づいて作られた。上部が円形、下部が方形の覆鉢形二重の塔が一般。(C)小学館」。つまり、屋蓋が単層のものを宝塔といい、裳階を付けたものが多宝塔ということになる。



右の図が一般的な形で、軸部と首部の間の屋根が裳腰である。戸隠の多宝塔は首部が明確ではなく、軸部が六角形である。相輪も不明確である。欠けたり別の物を組み立て直しているのかも知れない。

次の写真は上田の常楽寺の多宝塔だが裳腰も首部もはっきりしている。

「天台宗では、初め『法華經(ほけきょう)』を法舍利(ほうしやり)とし、それに胎蔵(たいざう)界の五仏を祀(まつ)った多宝塔を建立、真言(しんごん)宗では大日如来(だいにちにょらい)を祀る建物として多宝塔(大塔)が建設されている。(C)小学館」

大乘妙典一字一石書写碑

『戸隠村の石像文化財』には「寛延四年儀道中誠法師書」とある。『戸隠 総合学術調査報告』207 頁には「寛延四儀道中誠建立」(寛延四年は 1751 年)とある。「歴史の道調査報告



書 XVI~XXII」は「寛延四年五月二日 儀道中誠法師拜書」と記す。実見するに、裏に「寛延四年^{辛未}儀道中誠法師^書」、その右に「五月二日」、左に「七月」。

大乘妙典とは衆生を迷いから悟りの世界に導いてくれる教えを記した經典、本来は大乗仏教の教義を記した經典全般を指すのであるが、一般的には法華經、妙法蓮華經のこと。

これは経塚の一種で、経塚とは、「仏教經典を供養ののち地下に埋納して小規模の封土を設けたもの。埋納顕現の直接的目的は、末法思想に基づく仏法書の保存にあるが、それは弥勒(みろく)信仰によるものであった。中国においては天台宗二祖慧思(えし) (515—577) によって始められ、日本では慈覚大師円仁(えんにん) (794—864) により中国からもたらされたといわれている。

その後、埋経は平安後期に隆盛を極めたが、多くは極楽往生(ごくらくおうじょう)、現世利

益(げんぜりやく)などを目的とした阿弥陀(あみだ)信仰によっている。さらに追善、逆修(ぎやくしゅ)を目的として営まれるものも現れ、経典の永劫(えいごう)への保存目的という本来の目的より離れて、しだいに供養者自身の願望と結び付いていった。

埋納経典としては、『法華経(ほけきょう)』『無量寿経(むりょうじゅきょう)』『阿弥陀経』『弥勒経』『般若心経(はんにやしんぎょう)』『大日経(だいにちきょう)』『金剛頂経(こんごうちょうきょう)』『理趣経(りしゅきょう)』などがある。これらの経典は、紙に書写された紙本経(しほんきょう)、瓦(かわら)に刻された瓦経(がきょう)、銅・石に刻された銅板経・滑石経(かつせききょう)、木に書かれた柿経(こけらきょう)、石に書かれた礫石経(れきせききょう) (一石に一字宛(あて)書かれた一字一石経)、貝殻の内側に書かれた貝殻経などがある。紙本経は経筒(きょうづつ)あるいは経箱に収納され、さらに小石室様遺構の中に埋置される例もある。そして鏡、刀子(とうす)などを悪魔除(よ)けとして添え、また銭貨、武器、装身具類などを奉養(ほうさい)するものが多い。この紙本経は平安時代より室町時代にかけて認められるのに対し、瓦経、銅板経、滑石経は平安時代のみ、礫石経、貝殻経は室町時代以降にみいだされることが多い。

平安時代の経塚は、寺院、神社の境内地あるいは霊地の眺望のよい丘陵上とか南・東斜面に営まれるのが一般的であり、さらに修験道(しゅげんどう)関係の金峯山(きんぶせん)、熊野、英彦(ひこ)山、白山(はくさん)などにも造営されている。また、室町～江戸時代の礫石経塚は、当時の集落に接する地より多くみいだされており、上部に石塔を造立しているものが多い。 (C)小学館



法華経の一字を一石に記して土中に埋めた供養塔は、近世中期以降盛んとなった大乘妙典納経廻国修行の風とも結びつき、その発願成就記念に建てられることが多かったという。この廻国は日本全国 66 カ国を巡礼し、1 国 1 カ所の霊場に法華経を 1 部ずつ納めるので、その者は六十六部またはたんに六部と言われた。

写真は万座温泉で見つかった一字一石経。ちなみに法華経の総字数は 69,384 字。世の中には多字一石というものもある。

持経者釈長明

持経者(じきょうしゃ)は、特に法華経を受持する行者を指し、「聖」とも言われ、多くは私僧であった。

「拾遺往生伝」1132 年に次のようにある。喜見菩薩は自分の身を焼いて仏を供養した菩薩。

持経者長明は、信濃国戸隠山の住僧なり。生年廿五にして、言語を断ちて三年、法花を誦して幾(いくばく)の日ぞ。毎日に百部なり。いまだ曾(むかし)より偃伏(たみまき)せず。邂逅(たまたま)に客に語りて曰く、吾はこれ喜見菩薩の後身なり。この処(こゝ)に來り生れて、身を焼くこと三遍なり。今生(じょうぜん)の終焉(しゅうえん)は、三月十五日を期(き)せむ。然れども兜率天の上は、來るに會(あ)はず限(かぎ)ありといへり。二月十八日、遂(ついに)もて身を焼きつ。時に永保年中なり。

今案ずるに、兜率上人は、西土の記に載せず。而るを已に喜見の後身と謂うへり。あに随意滅度にあらずや。故^{かろがゆゑ}にもてこれを記せり。

現代語訳

持経者長明は、信濃国戸隠山の住僧である。生れて廿五歳にして、言語を断ちて三年、法華経を誦してどれだけの年月が経ったであろうか。毎日、百回である。いまだ横になって休むことがない。たまたま客に語っていうには「私は喜見菩薩の生まれ変わりである。ここに来て生れて、身を焼くこと三遍である。今生の終わりは、三月十五日としたい。しかし、(兜率天の上は、来るに^{かた}限あり)」といへり。二月十八日、ついに身を火に投じて焼いた。時に永保年中であった。

今、思うに、兜率上人は、西土の記には載っていない。そうであるが自分を喜見の生まれ変わりという。どうして随意滅度でないことがあるのか。それでこれを記録した。

法燈国師

案内柱

法燈国師母公

祈願観音堂跡 宝篋印塔入口

(右側)

法燈国師(1207~1298)は信濃国神林村に生まれ19歳で出家東大寺で受戒の後入宋無門の法を嗣ぎ帰国して由良興国寺に住持 慈母を招いて孝養し母の死後32年間 跣足で墓参し92歳で歿した

(左側)

法燈国師の母公が筑摩郡神林村からこの地にあった観音様に詣でて祈願し国師が生誕したと伝えられている観音堂址に昭和九年七月奥田正造師が法華経一卷の写経石を埋葬して塔を建てた



参道から左に奥まで二百メートルほど入っていくと、観音堂址といわれ、付近の石祠や石塔を集めた仏塚がある。右側の宝篋印塔は、法燈国師の母がここで戸隠権現である観音さまに祈って国師を身ごもったという言い伝えにちなんで、供養のために地元の和田亀千代氏を中心に昭和九年に不言会(茶の湯と女子教育を結びつけた成蹊女学校校長の奥田正造が主催)が建立。一石に一字が書かれた法華経が埋蔵されている。

法燈国師(心地覚心 法燈国師は勅命による諡である勅諡)は臨濟宗の僧で、神林村(現松本市)の生まれで、19歳(一説に29歳)の時に東大寺で授戒。1249年に入宋。宋の無門慧開(むもんえかい)の法を嗣(つ)いで1254年帰朝。紀州由良の西方寺(現興国寺)を開山。金山寺味曾をもたらし、尺八を好んで虚無僧の元祖ともいわれる。

法燈国師の母がここで戸隠権現である観音さまに祈って国師を身ごもったことになっている。女人禁制の戸隠で法燈国師の母が祈るといのは変な話だが、国師に関わるもっとも古い文献である『元亨釈書』（1322年）に「釈覺心。姓常澄氏。信州神林県人。母祈_レ戸蔵山_レ仏_レ求_レ子。一夕夢。仏以_レ灯手授。覺有_レ娠焉。」とある。「戸蔵山」は「とくらさん」でどうやら東筑摩郡筑北村にある戸蔵山（富蔵山）岩殿寺のことらしいが、「戸蔵山」は「とがくしさん」と読めるので、誰かが間違えて有名な水内の戸隠山で祈ったことにしてしまったようである。『元亨釈書』でも戸隠山の仏に祈ったのであつて参詣したかどうかは云々していないが、参詣させてしまう伝承も生じ、『紀州由良鷲峯開山法燈円明国師之縁起』（1517）では、本人が「戸隠神宮院」で仏教と儒学まで学んでいる。さらに「武蔵志」（享和2年（1802）以前の寛政期頃）に「秩父郡本野上村臨濟宗惣持寺開山法灯国師、生は信州神林、父常澄氏、戸隠山習読に附て十九剃髮、東大寺にて受戒。国師画像あり、永仁六年九月二十日・開山覺心印」と書かれたりする。戸隠にとっては嬉しいことだが筑摩郡の浅間社の神宮寺のことであろうと云われている（「信濃温泉史についての雑考」牛山佳幸・「信濃」v. 58n. 17）。

戸蔵山が筑北村の岩殿寺であつたにせよ、松本の神林から戸隠に来るよりは容易とはいえ、途中の筑北村でも旅は難儀である。だから「母氏^{氏族失記}。無子。祈求戸隠観音靈像。」とある『鷲峰開山法燈円明国師行実年譜』（法嗣で由良西方寺の住持聖薫の編 1382年？）の方が実情に近いかもしれない。つまり戸隠の観音靈像に祈ったのであるとすれば家にいたままで戸隠の靈驗を蒙ることができる。もっとも戸隠奥院の聖観音がそのような靈像として出回っていたかどうかははなはだ心許ない。

宝篋印塔の刻字

四仏名種字 (法隆寺佐伯定胤大僧正)

台石・前面 万善同帰 (法隆寺佐伯定胤大僧正)

台石・裏面 昭和九年八月吉祥日

為正法興隆奉書写

妙法蓮華經

一字一石三礼

不言会

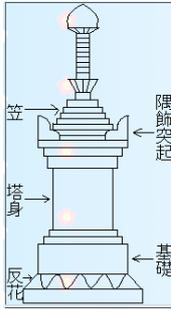
側面 法燈国師母公

御祈願之靈跡

「万善同帰」は「聖徳太子が法華經を以てこの日本の国造りをされたのも、「万善同帰」と言って、総ての善いことが統一した所に働き、社会の道德が守られ、善良なる風俗が育まれ、そして理想的な文化が開発されて行くことを法華經に觀たからです。」（ある HP）といった使われ方をしている。

参考 「信濃不言会史」 なお、未見ながら戸隠小学校蔵の「昭和九年六月 法華經一字一石三礼書写 供養塔造立名单 發願不言会」がある。

宝篋印塔

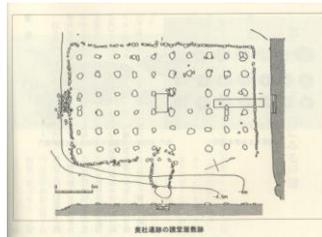


「宝篋印塔は方形の基礎の上に、方形の塔身をおき、上に段形になった笠石があり、相輪を立てる。笠石の四隅に隅飾りの突起があるのが特色。主に石造で、まれには金銅製や木製がある。本来は宝篋印陀羅尼の経文を納めたが、後には供養塔・墓碑とされた。(C)小学館」

つまりは、滅罪や延命などの利益から、追善（死後に供養すること）・逆修（生前にあらかじめ供養をすませること）の供養塔ということ。なお、文中に「宝篋印陀羅尼の経文を納めた」とあるが、戸隠のこの宝篋印塔には「法燈国師」の項に延べたように法華経が埋蔵されている。

講堂跡

例文



講堂川の橋を渡って講堂跡があります。礎石が六十箇所ほど見つかっています。伝承によれば、戸隠信仰の始まったもっとも古い時期は、第八代孝元天皇の五年です。これですと今から二千二百年ほど前、弥生時代のこととなっ

てちょっと古すぎます。次が今から千百六十年ほど前の嘉祥（かしょう）二年（849年）、空海や最澄が活躍した少し後ですが、これも伝承の域を出ません。次に堀川天皇の時代、平の清盛のおじいさんの時代、承德二年（1098年）に三間四面の堂が造られたといわれるのですが、このあたりから大部確からしくなります。十二世紀中頃の歌謡集『梁塵秘抄』には、「伊豆の走井」「駿河の富士山」「伯耆の大山」とともに信濃の戸隠が靈験所の一つとしてうたわれています。都で歌の材料となっていたわけですから、相当に確かな靈験所として戸隠が認められていたこととなります。その半世紀ほど前の建立とされるのがこの講堂の跡です。順次建て増しもされたようですが、十一世紀のものである中国の北宋の古銭が跡地から多数見つかっています。平安時代後期の土器も見つかっております。



銭の写真は戸隠のものではないが、こういったものというイメージ。



平安後期の緑釉陶器（左）と灰釉陶器（中央、右）。その釉薬から美濃地方（現・岐阜県南部）で焼かれたものと思われる。戸隠の出土品中で最古のもの。（『戸隠信仰の世界』より）

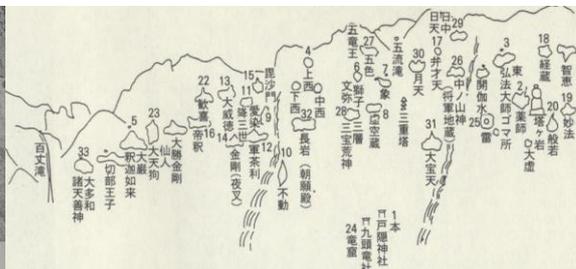


俗に戸隠三千坊などといいますが、これはオーバーにしても十一世紀ころには相当規模の寺が営まれていたと思われます。火災にあい、神仏分離の行きすぎた廃仏毀釈にあい、多くの宝物が失われましたが、現在は平安末か鎌倉初期と思われる法華経の一部が、重要文化財として中社に保存されています。

また戸隠山の斜面には三十三窟といわれる行場、修験者が修行をする洞窟が点在しています。

今日のご準備がないかと思われませんが、ちょっとした山登りの準備があれば奥社の横から小一時間で弘法の護摩所などという崖の中腹に掘られた窟などを見ることが出来ます。後日、是非おいで下さい。

さて、奥社へは登りではありますが、あと、十分ほどでしょうか。



《参考》

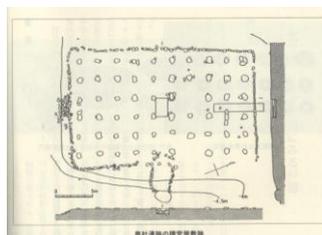
講堂

案内板

<大講堂屋敷跡>

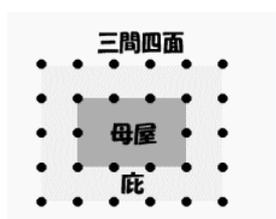
戸隠山は修験道の道場として鎌倉室町時代は段賑を極めました。この大講堂は堀河天皇の承徳2年（1098）に建立されました。

間口 24.3m 奥行 13.5m 礎石 60 個



講堂川の橋を渡って礎石六十箇ほどの講堂跡がある。伝承によれば、戸隠

信仰の始まったもっとも古い時期は、第八代孝元天皇の五年だが、これだと今から二千二百年ほど前、弥生時代のこととなってちょっと古すぎる。次が今から千百六十年ほど前の嘉祥（かしょう）二年（849年）、空海や最澄が活躍した少し後だが、これも伝承の域を出ない。次に『戸隠山顕光寺流記並序』によれば、堀川天皇の時代、平の清盛のおじいさんの時代の承德二年（1098年）に三間四面の堂が造られたといわれ、このあたりから大部確からしくなる。十二世紀中頃の歌謡集『梁塵秘抄』には、「伊豆の走井」「駿河の富士山」「伯耆の大山」とともに信濃の戸隠が靈験所の一つとしてうたわれていて、都で歌の材料となっていたわけだから、相当に確かな靈験所として戸隠が認められていたことになる。その半世紀ほど前の建立とされるのがこの講堂の跡。順次建て増しもされたようだが、十一世紀のものである中国の北宋の古銭や平安時代後期の土器も見つかっている。



この三間四面の堂というのは「間面記法」によると思われる。間は柱の間であって長さではない。三間とは母屋を正面から見ると柱が四本あって間が三つ開いているということ。奥行きは二間と決まっているので省略される。面は母屋の外側に隣接した庇（屋根のことではなく、母屋に付属した部屋）で、四面とあるから母屋の前後左右に庇の間があったことになる。ただし、「間面記法」は室町時代

前期頃まで使用され、以後変わる。一四五八年の『戸隠山顕光寺流記並序』が、「間面記法」に従っているかどうかは疑問が残るが、仏教関係者による文書であるから、古式によっているであろう。

講堂で何を講じたかということだが、戸隠の行者は法華経を重んずる。『戸隠山顕光寺流記並序』の学問行者は法華経を唱えていたし、火定の長明も法華経の持経者。講堂も法華八講などに用いたのだろう。

法華八講は法華経八巻を八座に分けて、一日を朝・夕の二座に分け、一度に一巻ずつ修し、四日間で講じる法会。法華八講座。追善供養、極楽往生を願って行う。

『梁塵秘抄』

平安末期の歌謡集。後白河院編。「四方の靈験所は、伊豆の走井、信濃の戸隠、駿河の富士山、伯耆の大山、丹後の成相とか、土佐の室生と讃岐の志度の道場とこそ聞け」とある。

紙本墨書法華経残闕四卷

重要文化財。12世紀（平安時代）。貴族の間で行われた写経の装飾経。1行8基の多宝塔を30列に雲母刷りにしてその1基に1字ずつ経文を書く。「一字宝塔経」ともいう。

講堂跡から本社へ

至誠碑



昭和四十年建立

奥社手前の左側岩陰の石仏三体



ひとつは坐形の聖観音、背面に「聖観音 施主常楽坊作之 右再建之者常楽院善慶 文政六未年七月吉日」とある。文政二年は 1819 年。他の二体は地藏像。常楽坊・常楽院は奥院の院坊。

九頭龍社・本社

例文



左が九頭龍大神（くずりゅうのおおかみ）の社であります。拝殿の後から右上に廻廊が続き、その先が洞窟になっています。その洞窟の中には九つの頭を持った大蛇が住み、神官が毎日穴の中に米三升をお供えし、そのまゝ後を振り返ることなく戻って参ります。翌日にはお供え物は一つも残らず無くなっているとのこと。また九頭龍さんは梨を好まれて心願のある人が梨を穴の内へ入れてお祈りしますと梨を咬む音が聞えるとか、また、歯の病のある人は、一生梨を食べないと誓えば、かならず効果があると伝えられています。

江戸時代までは九頭龍大権現と申し上げ、戸隠信仰の中心でありました。水の神様として越後からも農家の方が雨乞いなどに参詣されていました。

昔、九頭龍が山を守護することを誓って洞窟に籠もったとのこと。であります。



戸隠の名前は、学問行者という修行者が九頭龍さんを戸でもって洞窟に隠したからだといわれているのが仏教系の伝承です。

天の岩戸を引き開けた手力雄命が祭られていますのが、右の本社であります。度重なる雪崩でよく崩壊しますのでいまはコンクリート造りになっています。

神代の昔、天上の^{たかまがはら}高天原での出来事です。弟である^{すきのおのみこと}須佐之男命（素盞鳴命）の乱暴を恐れた^{あまてらすおおかみ}天照大御神は天の岩屋戸に籠もってしまい、世の中が真っ暗になってしまいます。困った神々は^{たかみむすびのかみ}高御産巢日神の御子にあたる中社の祭神である^{おいかみ}思金命（思兼命）のアイデアで、岩屋の前で大騒ぎをします。火之御子社に祭っている^{あめうづめ}天の宇受売の命が胸もあらわに下半身まで見えようかという姿で踊りますと、神々は大笑い。天照大御

神は「私が籠もってしまったのにどうしてみんなは楽しそうなのか」と不思議に思って岩戸をそうっと開けますと、脇に隠れていた手力雄命が岩戸をぐいと引き開けて遠くへ投げ飛ばします。こうして世の中はまた明るくなってめでたし、めでたしということになります。投げ飛ばした岩戸が信濃の国に落ちて戸隠山になります。戸を信濃の国に隠したから戸隠山というのが神道系の伝承です。

九頭龍さんにせよ手力雄命にせよ洞窟の中に鎮座されているのが特徴であります。戸隠三十三窟という修験者が修行をする行場がありましたが、ここから戸隠信仰が発達したからだと思います。

《参考》

最初は、よくある質問に沿って

ここの標高はどれほどですか？

涼しいですね。標高はどれ位ですか。

奥社は 1350 メートル。奥社入口は標高 1215 メートルです。

社紋・なぜ菊の御門があるのですか？



社殿に菊の紋があるのは戦前まで国幣小社であったことによる。

社紋は鎌卍である。農業の鎌を現すと言われている。いつから紋が出来たのかは不明。紋の発祥は平安時代の貴族が自分の牛車を見分けるためにつけた車紋で、これを武士が

旗印などにも用いた、という。

「■官国幣社

官幣社(かんぺいしや)と国幣社(こくへいしや)のこと。神社が国家管理下にあった時代、国家により経営され、祭祀(さいし)が行われ、また官司の任免をされた神社で、官社ともよばれ、府県社以下のいわゆる民社と対していた。平安初期の延喜(えんぎ)の制では、官幣社とは神祇(じんぎ)官より例幣が奉られ、国幣社とは国司の庁より幣帛(へいはく)が奉られる神社であったが、1874 年(明治七年)の制では、官幣社は祈年(きねん)祭・新嘗(にいなめ)祭・例祭に、国幣社は祈年祭・新嘗祭に皇室から幣帛を供進(きょうしん)され、国幣社の例祭には国庫から幣帛料が供進されることとなっていた。

明治の制を祭神からみると、皇室の祖神または建国に功績のあった神、天皇、国家に功労のあった神を祀(まつ)る神社が官幣社、湊川(みなとがわ)神社など忠臣を祀る神社が別格官幣社、国土開発・地方開拓に功労のあった神を祀る神社が国幣社とされ、それぞれに大社・中社・小社と区分されていた。 〈鎌田純一〉 (C)小学館

戸隠曼荼羅



左は越志家の「紙本版刷淡彩四所権現本地曼荼羅」。文字は、真ん中上は横書きで「奥院手力雄命御本地聖観世音」、左は宝光院天表春命御本地將軍地蔵、右は「中院天思兼命御本地釈迦如来」、中央に「御本地弁才天」、下に九頭龍だが、右に「地主九頭龍大権現」、左に「御本地大弁才天」とある。下は横書きで「神州戸隠山」。右は保科の武田家蔵の曼荼羅。上が「奥院手力雄尊」、右が「中院天思兼尊」、左が「宝光院天表春尊」。下に横書きで「神州戸隠山三社大権現」とある。戸隠の御師はこれらの曼荼羅をもって村々の講を廻り、お札などを配布し、代わりに初穂を頂いたと思われる。



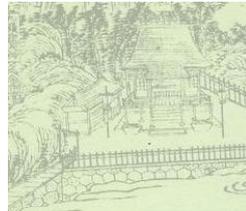
本社の鳥居



戸隠神社唯一の神明鳥居であるが、江戸時代の『善光寺道名所図会』の地図にはそれらしきものはなにもない。明治以後の「信州戸隠神社略図」では二本の縦の柱の上に横一本を渡してある門のごときものが設置してある。「米山一政著作集第一巻」に掲載の写真では明神鳥居。個人所有の写真でも明神鳥居。現在の神明鳥居は、手力雄命が天照大御神の相殿であるので、神宮の神明鳥居に倣ったか。「戸隠神社報」（平成 8 年 1 月 1 日）では靖国型という言い方をしている。



『善光寺道名所図会』



「信州戸隠神社略図」



本社・手力雄命



昭和 39 年再建（「戸隠 総合学術調査報告」所載）の本社と昭和 54 年再建のコンクリート造りの現在の本社。明 35 年頃の絵葉書写真（「絵葉書にみる懐かしの戸隠」所収）や「信州戸隠神社略図」では平入りであるが、今は妻入りに

変わっている。もっとも江戸時代の『善光寺道名所図会』の絵も妻入りである。

雪崩のすごさについては、「戸隠百首」に、

奥嶽のわばの音

おそろしや降積雪の高ねよりはり裂け落るいかつちの音とある。「わば」は表層雪崩のこと。

雪崩と社殿

本社は雪崩で何度も崩壊、再建を繰り返している。雪崩は、明治以後でも、明治二年、昭和十一年、三十七年、五十三年と被害を出している。雪庇を止める工事や雪崩の方向を変える治山工事に加え、岩盤の中に御神体を納める形で昭和五十四年にコンクリート造りの現在の本社ができた。

九頭龍社は昭和十一年の雪崩で、神職一人が亡くなっている。翌十二年に一部鉄筋コンクリート造りのいまの社殿となる。（『戸隠信仰の歴史』の「第六章 災害と戸隠神社」より）。

手力雄命の案内板と祭事

戸隠神社・奥社（御本社）

御祭神 あまのたじからのおのたご 天手力雄命

御由緒

御鎮座年代古く人皇代八代孝元天皇の五年（皇紀二〇七）と云われ、神話に名高い天照皇大神が御弟神須佐之男命の度重なる飛行に天岩屋戸にお隠れになった時、天岩戸をお開きになった、神力無双の神で開運守護・五穀豊穰・家内安全・諸災消除の神として、国民の弥栄の上に高大な御神徳を恵み給う大神です。

祈年祭 五月十五日

祭日 例祭 八月十五日

新嘗祭 十一月二十三日

主な祭事

- 1月1日 歳旦祭 新しい年の初めにあたり、世界平和や日本の繁栄、国民の幸福をお祈りするお祭り。
- 5月15日 祈年祭 お米を始めとする五穀や農産物の豊作をお祈りするお祭り。11月の新嘗祭と対になる祭祀。陰暦毎年2月4日に行われ、一年の五穀豊穰などを祈るものであったが、伊勢神宮を始め全国の神社では今日では2月17日を中心に大祭として執り行っている。ただし、地域によって月は異なる。戸隠神社が5月であるのは雪深い土地柄によるか。
- 6月30日 大祓式 半年の間に知らず知らず犯してしまった罪や触れてしまった穢を祓い、残りの半年をつつがなく過ごせるように祈るお祭り。
夏越しの祓えにあたる（毎年六月晦日に宮中および各神社で行われる祓えの行事。上古から行われた民族信仰に基づく年中行事の一つで、浅茅（あさじ）で輪形を作り、参詣人にくぐらせ、茅麻の幣で身を祓い清めたり、また、撫物（なでもの）の人形（ひとがた）を川原に持ち出して、

水辺に齋串(いぐし)を立て、祝詞をとнаえて祓えを行ったりする。水無月祓え。夏祓え。《季・夏》(C)小学館)。

8月15日 例祭 年に1度、神社に由緒ある日をもって行う大祭のことで、祈年祭、新嘗祭と共に三大祭の一つです。奥社例祭のみ献幣使が参向し、神社本庁より幣帛を奉る。戸隠神社はなぜ八月十五日か。

11月23日 新嘗祭(にいなめのまつり、にいなめさい、しんじょうさい) お米を始めとする五穀や農産物の豊作を感謝するお祭り。

天皇も五穀の新穀を天神地祇に勧め、また、自らもこれを食して、その年の収穫を感謝する。伊勢神宮およびそれに連なる神社の祭儀でもある。

天皇が即位した最初の新嘗祭を大嘗祭という。

12月31日 午後4時 大祓式(奥社) 1年の間に知らず知らず犯してしまった罪や触れてしまった穢を祓い、新しい年をつつがなく過ごせるように祈るお祭り。

31日 午後6時 除夜祭(奥社) 1年間の神恩に感謝し、新しい年もお守りいただけるようご祈念するお祭り。

午後11時 越年神事(奥社) 晚餐を終えた神職一同は社殿に入り、以後無言で過ごす。元日の朝、祭祀を終え朝日を待ってはじめて「あけましておめでとう」と唱える。天照大御神の岩戸籠もりを模したもので、岩戸開き神事という(「上水内神社誌」226頁)。

室町時代の『節用集』に、天照が岩戸を開けて外を見るために「目を出し」、神々が喜んだので、「おめでたい」ことを「目出度」というとある。

年越えの無言行

常闇と暮行時を思へ人いかにせんたより便言ふすへのなき 「戸隠百首」

全国の戸隠神社・九頭竜神社

小林一郎「長野県外の戸隠神社と飯綱(飯縄)神社一覧」によれば奈良県の八箇所を最多に全国に三十三箇所の戸隠神社がある。

池田源太「葛神と戸隠神社」(『神道学』第38号、昭和38年)によれば、紀伊・大和の九頭(国津・葛神)神社の九頭神は磐排いはをしわく別命で、その磐排別は蛇類をその思考の背後に持つ気配があり、かつ磐排別の語は岩戸を押し分け開いた手力雄を連想させ、それでは、ということで、近代の神道家が敢えてかの有名な戸隠神社にあやかろうということで、九頭神が戸隠神社になることも起こったようだ、ということである。

たしかに、戸隠神社は江戸時代までは顕光寺であり、「戸隠神社」の名称は明治になってか

らのことであるから「戸隠神社」が古くから全国各地にある訳はないことになる。
紀伊・大和の場合は「九頭」にからむことからの名称変更だが、手力雄命を祭神とすることからも戸隠神社になる。東京の湯島天神に摂社戸隠神社がある。雄略天皇二年に手力雄命を奉祭したのがはじまりで、天正十年より管公を祭り、こちらが中心となって天神社になるわけである。主神の移動であり、それによって、いつ手力雄命を祭る社が分離したか不明であるが、これを摂社として「戸隠神社」と呼ぶのは明治以降のはずである。江戸時代まで手力雄命を祭った顕光寺は存在したが戸隠神社は存在しなかったのであるから。岐阜県郡上市和良町（旧郡上郡和良村）にある戸隠神社はその名前の変遷をウィキペディア上では次のように説明されている。創建時期は不明であるものの、『美濃国神名帳』に載る郡上郡7社の中の「正六位上国津明神」であるという。鎌倉時代以降「九頭宮」と称された。明治6年（1873年）、社名を「九頭宮」から「上沢神社」へ改め、更に翌7年（1874年）、現社名「戸隠神社」に改称した。どうも戸隠神社の名前は明治になって全国制覇にのりだしたようである。

九頭竜神社は箱根が有名。人を害する毒龍を万巻上人が退治した縁起となっている。また、加賀の白山の場合は、九頭竜神社はないが、「九頭竜川」がある。寛平元年(889)6月、平泉寺の白山権現が衆徒の前に姿を現して、尊像を川に浮かべると九つの頭を持った竜が現れ、尊像を頂くようにして川を流れ下り、黒竜大明神の対岸に泳ぎ着いた。以来、この川を「九頭竜川」と呼ぶようになったといった話しになっている。川の名前については「クズレ」川の語呂合わせとの説もある。

白山に関する縁起としては虎関師鍊こかんしれんの仏教史書『元亨釈書』一三二二年元亨二年に出てきて、泰澄が白山の天嶺の絶頂に登って緑碧の池の縁で一生懸命に経を唱えていると、たちまちに九頭龍が池の表に現れた。泰澄は、「これは方便としての現体である。本地の真身ではない。」といて、ますますしっかりと経を唱えていた。しばらくすると、十一面観自在菩薩が現れ、妙なる様は整って威厳があり、光りきらめき盛んに輝いている、とある。つまり本地が十一面観音で九頭龍はその権現である。

戸隠大神

本社の右側に「戸隠大神」という社がある。手力雄命でも九頭龍さんでもない。手力雄命とか九頭龍、聖観音などと人は名前を付けがちだが、土地の人にとっては「戸隠の神」以外の何物でもない。熊野の本宮でも、阿弥陀如来を本地とした家都美御子大神などというのも外からの知識のなせる業で、古くは単純に「熊野坐神」くまのにいますかみ（熊野にいらっしやる神）であった。この場合に、仏教では熊野権現とかいったが、戸隠なら



「戸隠権現」である。が、明治になって神社で権現と勝するのは禁じられたから「明治元年戸隠権現を戸隠大神と改称せしより」（『長野県町村誌』）となる。つまり、戸隠大神は戸隠の神様をひっくるめたいいかたである。

なお、妙なことにこの戸隠大神が拝殿だとするとその正殿にあたる後の一には、九頭龍の正殿がある。戸隠大神を拝むと九頭龍を拝むことになってしまう。意図してそうなっていると主張するのではない。そういう位置関係にあるということである。

なお、明治時代の写真にも昭和 39 年再建の時の写真にもあるが、『善光寺道名所図会』の絵にはこの社はない。

九頭龍関係の伝承各種

『阿婆縛抄』と『戸隠山頭光寺流記並序』の内容の違いに注意。

『阿婆縛抄』

鬼（奇っ怪なものという意味）
嘉祥二年
名も判らない別当
仏は湧出しない
地中に向かって呪文を唱える
四十回余り法を破り過ちを犯す
鬼は解脱せずに洞窟に閉じこめられる
などなど。

『戸隠山頭光寺流記並序』

大竜とか九頭龍というが要するに大蛇
嘉祥三年
別当澄範
仏が湧出
呪文が地中から聞こえる
四十回余り寺が崩壊する
蛇は解脱して洞窟に籠もる

『阿婆縛抄』

一二四二年～一二七九年
仁治三年～弘安二年

戸隠寺 仁明天皇の御代

嘉祥二年頃、学問修行者が飯縄山で七日間、西の大嵩に向って祈念した。独古を擲つと飛んで行って墜ちた。すぐに行ってこれを見ると、大石屋があった。その場所で法華経を唱えていると、南方から臭い風が吹いてくる。そして九頭一尾の鬼がやって来た。

「誰が法華経を唱えているのか。以前に祈った者は、自分が聴聞に来ると、自分の毒気の風に当たって、こちらには害心が無いのに、触れる者は皆死んでしまった。自分は前の別当で、貪欲なままに施物を虚しく用いて修行を怠ったので、そのためにこのような身になってしまった。ここでこのように法を破り過ちを犯すことが四十回余りになる。自分も功德によって、最後には菩提を得たいものである」。

学問は言った。

「鬼は形を隠すものだ」。

「鬼は形を隠すものだ」という学問の言葉の通りに、鬼は姿を隠すという鬼本来のあり方に戻った。そこを名づけて龍尾という。鬼が石屋内に入って籠ったので、学問は石屋の戸を封じて、地中に向かって声高に唱えて言った。

「南無常住界会聖觀自在尊三所利生大權現聖者」。

それで此の山の名を戸隠寺ということになった。その理由は龍尾鬼を石室の戸で封じて、それから建立した故である。また、飯縄山の前に戸を立てたようであるからだ、ともいう。

『顕光寺流記並序』

一四五八年
長祿二年

日がれた暮が、興奮冷めやらずに、地相を占って西窟に居を占め、拝拝、懺悔した修法のための壇である
瑪瑙の座が今もある。
香花が供えてあったり、あるいは読誦し、修行する者がいる。

その後、金剛杵を投じて、誓って言った。「未来に渡って仏法が繁昌し、すべての生きものの福を豊かにするように。地に着いたならばただちに光を放て」と。杵の後をずっと追いかけていくと、その杵はるか百余町を飛んで、宝窟に留り光明を放った。

ここに獵師がいた。杵の光に驚いて急いで逃げ出した。私に遇ってその事を語った。私はもとよりこの事は知っていたその獵師は今の獵師の護法神である。私は杵の光を尋ねて行き、この洞に止まって、地主神を呼び出すべく深く祈念すると、声が地の底にあって、高声に唱えて言う。「南無常住界会大慈大悲聖觀自在四所本躰、三所權現放光与樂」と云々。

この声のまだ終わらないうちに、聖觀音の像が、光が遠くから尊容を照す中、赫奕として一莖四莖の蓮花に坐して、聖觀音・千手・釈迦・地藏がたちまちのうちに湧出した、と云々。

歓喜の涙を流し、仏を深く信じて仰ぎ、頭をたれて、経を読み、法文を唱えていると、その夜におよんでにわかに南方から臭い風がむんむんと吹いてきて、九頭一尾の大龍がやって来て言う。

「喜ばしいことだよ、行者。お前がこの窟に来て、錫杖を振読し、六根懺悔の四安樂の行をなしたので、我が毒気はみんな無くなり、もう人を害することはない。すぐ近くに来い。じっくりとお前に話そう。

当山は崩壊することすでに四十余回である。我は寺務を行うこと七度、最後の別当澄範である。僧物ならぬ仏物をないがしろにしたので、蛇の身になってしまった。長い年月を経て、今や業障が蛇の鱗となったが、錫杖ならびに法音を聞いて解脱を得た。それで未来永遠にわたり此山を守護することを誓おう。お前はしかと菩提心をもって、早く大伽藍を建てよ。

さて、峯に五丈の白石がある。面は白い壁のようで、金剛界と胎藏界の曼荼羅を顕している。それで両界山という。前に宝石の密壇がある。釈迦仏の前に出られた迦葉仏が説法し修行した所である。すべてで三十三所の窟がある。大慈大悲の觀世音菩薩が現れてお会いできる。菩薩は昼夜を問わずに万民を擁護し、身・口・意による悪い行いをなしたわれわれ生き物を救ってくれる。それで一度この山に登れば永く死後の世界での苦を逃れ、苦しい運命もまたよく変えることができる。」と、言い終わって、僧侶の法式等を定めて本窟に還った。

その時に大盤石をもって本窟の戸を閉ざして籠もったので、人に会うことは出来ない。

それで戸隠山と名づけたのである。本当のところは手力男命が天の岩戸を隠して置いたので戸隠という。その戸は今もある。また金剛杵の光を顕わしたので顕光寺という。

その後、九頭龍権現といい、毎朝朝御供をお供えすると、天下の吉凶を示す。それで仁祠を敬信し、仏法を盛んにし、堂舎が建ち、禪定を修する僧侶は神の威徳を仰ぎ、すなわちここを結界の地とする。修道上の妨げとなる煩惱障、業障、生障、法障、所知障の五つの障の雲霧を払い、淫欲を離れ戒を守る浄行の澄み切った月のような心を磨く。まことに諸仏が、思いのままに救いのはたらきを行う山、四接能弘の処であり、ここを本院という。

『和漢三才図会』

一七一二年
正徳二年

九頭竜権現は、伝えられるところによれば、神の形は九頭であって巖窟の内にいる。梨を神供とする。(毎夜丑の刻に、玄米三升をこれに供える。おそらくは当山の神だろう。そこのところは秘されている)(別当は天台宗。三年間、苦行して勤める。また三年立つと交代する)

注意・別当と燈明役が混同されている

『東遊記』

後編 一七九七
年・寛政九年 橘南谿

この山に大な洞穴がある。その穴の中に大蛇がいる。九頭龍権現と名付けてこの山の鎮守の神だという。頭が九つある龍で神変不思議の霊神である。社人が毎日穴の中に神供を供えて、そのまゝ後をかえりみずに退いて帰る。翌日はその神供の物一つも残っていないという。少しでも火のけがれた食は、そのまゝにしておいてお食べにならないという。またたいそう梨を好まれる。誰でも心願のある人が梨を穴の内へ入れて祈念すると、祈っている間に穴の中で梨を食べる音が聞える。人々は皆恐れて眼をふさいでしまってその形を見た者はいない。いろいろな願望が叶わないということはない。上方でも梨を断って虫喰歯の痛を治そうと願を立てる人がある。遠方ではあるが奇効があるという。

天の岩戸開き

実は、『古事記』では手力雄命は岩戸を開けてはいない。天照大御神自身が開けて、さらに少し出た時に手を持って引き出すだけである。もちろん岩戸を放り投げてもない。『日本書紀』は本文以外にいろいろな説をあげているが、その一つでは戸を開けている。『記紀』につづく文献に『古語拾遺』があるが、ここでは本文で戸を開け、かつ新殿に移している。この『古語拾遺』が後世よく読まれたようで、手力雄命の岩戸開きが定着する。しかし、まだ戸隠には落ちてこない。はっきりと落ちてきたのは『平家物語』である。次に『古事記』と『平家物語』をあげておく。

『古事記』

それで天照大御神は須佐之男命の乱暴を見て畏れ、天の石屋の戸を開き、お籠りになられた。それで、高天原はすっかり暗くなり、また葦原の中つ国もことごとく暗くなり、常夜となった。それですべての神の声は五月蠅い蠅の鳴くようになり、すべての災いがみんな起った。それで八百万の神は、天の安の河原に集まって、

高御産巢日たかみむすひの神の御子、思金の神に考えさせて、常世の長鳴鳥を集め、鳴かせ、天の安の河の川上の天の固い石を取り、天の金山の鉄を取って、鍛冶の天津麻羅あまつまらを探し出し、伊斯許理度売命いしこりどめのみことに命じて鏡を作らせ、玉祖命たまのむすのみことに命じて八尺の勾玉やさかまがたまのたくさんの御すまるの玉飾りを作らせ、天兒屋命あまのこやれのみこと・布刀玉命ふとたまのみことを呼び出して、天の香山の雄鹿の肩の骨をそっくり抜き取り、天の香山の桜を取ってその骨を焼いて占い、天の香山のたくさんの榊やさかを根こそぎ取って、その上の方の枝に八尺の勾玉まがたまのたくさんの御すまるの玉飾りをつけ、中の枝には八尺の鏡をかけ、下の枝には白い幣、青い幣を下げ、このいろいろな物は布刀玉命が御幣として持ち、天兒屋命が祝詞をあげ、天の手力男神が戸の脇に隠れて立ち、天の宇受女命が襷さきに天の香山の天の日影蔓を掛け、天の真析蔓を髪飾りとして、天の香山の小竹を手草に結んで、天の石屋の戸の前に桶を伏せて、踏み轟かして、神懸りして、胸乳を出して、裳緒もひもを女陰にまで押し下げた。こうして、高天原がどよめくほどに、八百万の神々がともに笑った。それで天照大御神は不審に思って、天の石屋の戸を細く開けて内からおっしゃったことには、「私が隠れ籠もったので、天の原は、自然と暗く、また、葦原の中つ国もまた、みな暗くなったと思ったが、なぜ天宇受売は楽しく踊り、また、八百万神もみな笑っているのか」とおっしゃった。

そこで天宇受売が申して言われるには、「あなた様にもまして貴い神がいらっしゃるので、喜び笑って歌い踊っています」。このように言っている間に、天兒屋命と布刀玉命がその鏡を差し出して、天照大御神にお見せ申し上げると、天照大御神はますます不審に思って、少しずつ戸から出て、のぞかれる時、その隠れ立っていた天手力男神が、その御手を取って引き出しと、すぐ布刀玉命が注連縄でもって、その御後に引き渡し、申しあげるには、「これから内側に戻ることはできません」。そこで、天照大御神が出られた時に、高天原も葦原の中つ国は自然と照り明るくなることができました。

『平家物語』

天照大神、岩戸を細目にお開けになって、御覧になられた時、世の中少し明るくなって、お集まりになっていた神々の御顔が白々と見えたので、天照大神は岩戸の内から「面白い」とおっしゃった。「おもしろ」という言葉それからはじまったのである。天照大神が岩戸から御目を少し出されたのを、集まっていらいらっしゃった神さま達が「ああ、目出たい」と気負われたので、それからは喜びの言葉を、「めでたい」という。その時、手力雄命という大力の神がいたが、「えい」と声をあげて、岩戸をひき開き、扉をひきちぎって、虚空へ遠くお投げられたところ、信濃国に落ちた。戸隠の明神がこれである。

注意・ここでは手力雄命ではなく戸そのものが戸隠の明神ということになっている。

戸隠の名の由来

- 1 龍尾鬼を戸で隠した山だから 『阿婆縛抄』

- 2 飯綱山を戸のように隠す山だから 『阿婆縛抄』
 - 3 手力雄命が天の岩戸を隠した山だから 『戸隠山顕光寺流記並序』
 - 4 手力雄命が戸に隠れたその戸で出来た山 谷川士清『和訓栞』一八〇五年文化二年は、「とがくし 信濃国に戸隠明神まします古事記に隠立磐戸之戸腋」とあれはとかくれと訓すへし」とある。手力雄命が戸に隠れたその戸で出来た山ということになる。
 - 5 戸が山と化して隠れた山 平田篤胤『古史伝』に「とがくり」（斗我久理）の訛であるという。それ以上の説明はないが、「戸が隠れた」と解しているのか。
- 戸隠山が岩戸であるという伝承は広く確立しているが、なぜ戸隠山というかという伝承は確立していない。また、本来、命名の由来は判らないもので、後世、もっともらしい理屈を付けるだけだから仕方がない。

手力雄命と思兼命の親子関係

『記紀』は手力雄命の親族関係には触れていないが、思兼命の指示によって岩戸開きで活躍するので思兼命と親子として結びつけられていく。

最初に結びつけて思兼命の御子としたのは『神皇実録』二七五年から二八八年の間かで、江戸時代の『先代旧事本紀大成経』一六七九年延宝七年または翌年）では「天八意命神は御子の手力雄命を連れて、科野国に天降り、みずから吾道宮を立て鎮座なされる」と、息子の手力雄を伴って吾道宮に来たことになる。さらに江戸時代の百科事典『和漢三才図会』（一七一二年）でも「天思兼命の子」とされている。ただし、近年ではあまり親子関係は強調されない傾向にある。

手力雄命と九頭龍の関係

『戸隠昔事縁起』には、九頭龍さんは手力雄命の分御魂わけみたまであるという話も伝えられている。神道では神さまの御魂は和御魂にぎみたま、荒御魂あらかみたま、幸御魂さきみたま、奇御魂くしみたまの四魂からなるという考えがある。そこで、岩戸が落ちてきたときに手力雄命の荒御魂あらかみたま（勇魂）と奇御魂くしみたまが九頭龍様となって戸隠に現れて岩戸を守り、後に本体の御魂がお出でになったときにこれをお迎えし、その後も側らにお仕えしている、という。『戸隠昔事縁起』は戦国時代の古文書とされているが、根拠はない。

洞窟に鎮座する手力雄命

九頭龍はもとより手力雄命が洞窟の中に鎮座しているのが戸隠の特徴である。

僧・堯恵の『善光寺記行』一四六五年寛正六年には「社頭は北の嶺の半にさしあがりて東に向ひ、大なる岩屋の内へ作り入りたり彼御神は多力雄にてまします」とある。九頭龍を手力雄命と見なしているようなのだが、戸隠山は天の岩戸であるという話が広まると共に、戸隠山の神は手力雄命であるという話も流布し始めたのであろう。その場合に洞窟の中に祭られていた九頭龍を手力雄命と考え、つまり手力雄命は洞窟に祭られている神となる。

この考えを決定づけたのはおそらく『先代旧事本紀大成経』（一六七九年）であろう。

孝元天皇の五年春正月、天八意命神は御子の手力雄命を連れて、科野国に天降り、みずから吾道宮を立て鎮座なされた。手力雄命は戸隠山に遷る。この山は深くて人が入

らず、みずから巖窟に鎮座なされた。

円空（一六三二年から一六九五年）にも、『大成経』によったのか、他の資料によったのかは不明であるが、次の歌がある。

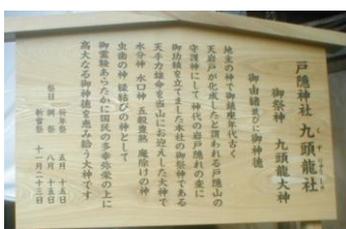
ちわやふる天岩戸をひきあけて権にそかわる戸蔵の神

岩屋に籠もった天照を引き出すために岩戸を開け、代わりに自分が岩屋に入ってしまった戸隠の神、というのである。この歌が世間で理解されるためには戸隠の手力雄命は洞窟に鎮座するということが知られている必要がある。どうやら洞窟内に鎮座する戸隠の手力雄命は世間によく知れ渡ったことのようなのである。

この場合に、九頭龍は三十三窟の内の龍窟だが、手力雄命の籠もる洞窟は当然本窟になる。本窟には聖観音が祭られていたのであるが、一七〇二年（元禄十五年）に五十二代別当となった子義が奥院にあった聖観音と引替えて奥院に手力雄命を安置している。

かくて戸隠の神は洞窟の神となる。

九頭龍大神の案内板



新しい方では、御神徳が「水分神 水口神 五穀豊穰 魔除の神 虫歯の神 縁結びの神」とあり、「開運守護」がなくなっていて「縁結び」が加えられている。

水の神様といわれて信仰されて射るが、もともとは山の怪異な神

2010年8月27日撮影

文面（古い案内板）

戸隠神社九頭龍社

御祭神 九頭龍大神

御由緒並びに御神徳

地主の神で御鎮座年代古く天の岩戸戸隠山の主守神にして神代の岩戸隠れの変に御功績を立てました御祭神 天手力男命を当山にお迎えした大神で水分神 水口神 五穀の神 開運守護魔除の神 虫歯の神 として御霊験あらたかに国民の多幸弥栄の上に高大なる御神徳を恵み給う大神様です

祈年祭 五月十五日

祭日 例大祭 八月十五日

新嘗祭 十一月二十三日

（「戸隠の修験道」和歌森太郎）で、そこに次第に現世的な御利益がくつつくが、『戸隠山頭光寺流記並序』によれば、寿命・福祿・求官・求子・智・道・除病患急難呪詛怨敵である。ここには農耕の類、請雨、瀬引の類が無い。乗因の「戸隠山大権現縁起」にいたって

「五穀成就之御神」となるが、請雨、瀬引など強調されていない。江戸末の「戸隠霊験談」では、単に「権現」という時にすべて九頭龍権現のこととするのも気が引けるので、九頭龍権現と明記される場合に限定するが、歯が生えそろった・いい酒が出来た・井戸水が出た・子宝を授かった・病気回復・蛇の祟りを免れた・洪水から助かった（二例）・安産・唾が治った・水が出た・寿命が延びた、と水関係のみならず諸々の御神徳を發揮している。九頭龍が水の神であり、降雨ももたらすと考えられていたのはその通りだが（「さいつ頃より雨降らざる事六拾余日、水かれ土乾きて草木更なり、人民の悲しびあへる様いはん方なし。一里余り隔てゝ四方の里々は、折よく夕立などして潤ひしが、善光寺の境を限りたる事の、さりとはいかならむ。こゝに九頭龍権現は龍王にましませば、雲を起し雨を降らし給ふ神力自在なり。（中略）俄に空かき曇り、雨ふり出で、車軸を流すが如し、こは九頭龍遊権現の感応の雨なりと人々罵りあへり 後略」善光寺別当権僧正孝寛の「戸隠詣」。「戸隠山案内記」より孫引き）、とはいえ、取り立てて水の神であることを強調した痕跡はない。戸隠と水といった時は、どうも種池の方が縁が深い。

御供物

九頭龍社の拝殿に、野生動物が出るので梨、玉子などの供物は社務所に持ってきて下さいとの張り紙がある。梨は江戸時代以来九頭龍の好物である。玉子は蛇の好む物との連想であろうが、「九頭龍大神瀬引きの祭式」によれば、村々で堤防の補強や河川の流れを制御するとき、祭事を行うが、杭を打ったり、一間ほどの塚を作ったり、周囲に土手を作ったりと大がかりなもので、鎮め物として大麻、榊、五穀、洗米と共にニワトリの玉子を用いる。ここから玉子が九頭龍の供物になる。梨、玉子を持ってくるのは熱心な講の信者と思われる。

御供所・社務所

今の社務所の所は江戸時代は御供所といった。神饌殿みけでんともいわれる建物で、神に捧げる神饌を調える場所であり、通常は拝殿に併設されていて独立しているのは珍しく、毎日米三升を九頭龍に供えるために特設されたと思われる。今は完全に社務所となり、炊飯は拝殿の向かって右奥で行われている。

一八〇一年（享和元年）の別当堯瓊による定めでは、山籠は丑刻に上堂して御供を取り調べて寅の上刻に御供所で本社向きの御供を灯明に渡し、山籠が御供を献備しに窟屋口に入るのを確かめてから灯明は本社へ御供を献備する（『戸隠 総合学術調査報告』73頁）。これだと、本社の方が後から献備されるようだが、『戸隠山案内記』（明治36年の宮司上井栄雄・宮澤春文共編）によれば本社に献供すると鼓を打鳴らし、それを聞いて後に九頭龍に献供するという。さて、現在はいかがであろうか。

狛犬



本社前の狛犬は 1870 年のもの。横面に「越後高田」とある。角の着いた本当の狛犬であり、構え姿勢をしている。「歴史の道調査報告書 XVI～XXII」には、「越後高田長門町 石彫師金蔵 倅米吉 取次安藤寛海 世話人明治三庚午造

営之」とあるという。入り口の常夜灯は安住院寛海であったが同一人物か。なお、「戸隠村の石像文化財」には裏面に「下木町 倉石真治」とあるというが、実見するに「ない」。

九頭龍の歯跡



笹の葉に丸い穴が一行に並んで開いている。九頭龍の歯跡といわれている。葉が丸まっている時に虫が一つ穴を開けた。その葉が成長して開くところなる。

持ち帰って田畑にさしておけば虫が発生しないとか。

御輿庫

『善光寺道名所図会』に「御輿庫本社の下、橋の向にあり、」とある。

天命稻荷

神社での参拝の仕方・二拝二拍一拝

まず九十度の二拝。ついで両手をのばして手のひらを合わせてから、右手を少し後ろへ下げる。(左手の親指の付け根の膨らんだ部分と右手の手のひらのへこんだ部分が合わさるぐらいのイメージで) 肩幅ほどに両手を開いて、拍手を二回。再び、両手をあわせ、願い事を祈って手を下ろす。そして一拝する。普通は、拍手は二拍だが、出雲大社など四拍。前後に軽く一拝を加えることもある。これを「一揖 (いちゆう)」という。

手水の時は、

- 一、右手で柄杓を取って、水を汲み、それをかけて左手を清める。
- 二、次に、左手に柄杓を持ちかえて、右手を清める。
- 三、再び柄杓を右手に持ちかえて、左の手のひらに水を受け、その水を口にに入れてすすぐ。
- 四、すすぎ終わったら、水をもう 1 度左手に流す
- 五、使った柄杓を立てて、柄の部分に水を流してすすぎ、元の位置に戻す。

戸隠を下りた仏様

奥社の聖観音→戸倉の長泉寺 中社の釈迦→長野市の地藏院 宝光社の勝軍地藏→善光寺

金幣



右の画像のような者が九頭龍社拝殿の中央にある。ただし、この画像は別物。金色の幣(ぬさ)。

「御幣

金、銀、白色、五色などの紙垂(しで)を幣串(へいぐし)に挿(はさ)んだもの。幣(ぬさ)、幣束を敬っていった語で、神前に用いる。串に挿む紙垂は、もとは四角形の紙を用いたが、のちには、その下方両側に、紙を裁って折った紙垂を付すようになり、さらに後世には紙垂を直接串に挿むようになった。紙垂の様式には、白川家、吉田家その他の諸流がある。また、御幣、幣、幣帛と書いて、いずれも「みてぐら」と読む。語義は、〔1〕手に持って捧(ささ)げることの御手座(みてくら)、〔2〕絹織物である御妙座(みたえくら)、〔3〕どっさりと供えることの充座(みてくら)、などの諸説があるが、いずれも神への奉り物の意である。したがって、御幣(ごへい)ももとは神への奉り物であったが、のちには神が憑依(ひょうい)する依代(よりしろ)として、あるいは神体として祀(まつ)られるようになった。そこで、土地により、歳徳神(としとくじん)、水神(すいじん)、山神(さんじん)、その他それぞれ神によって、紙の裁ち方や折り方など、さまざまな様式がある。なお、五色の場合は、青黄赤白黒の五色だが、黒のかわりに紫が用いられることが多い。〈沼部春友〉(C)小学館」

お神籤



神職が祝詞(のりと)を唱えたあと、御神籤箱の中からの一本の籤を引き、そこに書かれている番号の御神籤を神様の御教え(みおしえ)としてお渡ししています。

古いお札・お守

古いお札・お守はお護りいただいたことに感謝し、当神社の古守札お納所もしくはお近くの神社へお納めください。

御朱印

朱印は下記の授与所にて承っております。

奥社授与所

奥社朱印・九頭龍社朱印

中社授与所

中社朱印・火之御子社朱印

水分神

みくまりのかみ。「流水の分配をつかさどる神。「くまり」は「配る」の意。『古事記』によると、速秋津日子神(はやあきつひこのかみ)と速秋津比売(ひめ)神との子に、天之(あめの)水分神と国之(くにの)水分神の二神がある。水分神を祀(まつ)る神社は全国にあるが、延喜(えんぎ)式内社では大和(やまと)国(奈良県)の葛木(かつらぎ)、吉野、宇太(うだ)、都祁(つげ)の水分神社、河内(かわち)国の建(たて)水分神社、摂津(せつつ)国の天(あめの)水分豊浦命(とゆらのみこと)神社(ともに大阪府)などがある。なかでも吉野水分神社に関しては、698年(文武天皇2)に雨乞(あまご)いのために馬を献じたことが『続日本紀(しよくにほんぎ)』にみえる。水の神、農耕の神であるが、のちには「くまり」を「こもり」(子守り)と訛(なま)り、子供守護の神として信仰されるようになった。〈井之口章次〉 (C)小学館

水口の神

「水口祭

稲作儀礼の一つ。種粃(たねもみ)を播(ま)いたとき、苗代(なわしろ)の水口(取水口)で田の神を祭り、稲の生育を祈願する。季節の草花やツツジなどの枝を畦(あぜ)に挿し、種粃の残りでつくった焼き米を供え、普通、家族だけでひそやかに祭る。

また苗尺(なえじやく)、苗印(なえじるし)といって、田の中に棒を立てておき、苗がその高さにまで成長すれば田植(移植)適期の目安にしたが、苗印には前年秋の亥(い)の子や大師(だいし)講に供えた箸(はし)を保存しておいて使うことがあり、田の神を迎え祭る依代(よりしろ)とも考えられていた。

〈井之口章次〉 (C)小学館